

福田補助資料

○旭山の奇行 『近世畸人伝』巻五

旭山戸田氏 自号无悶子。通名斎宮(いつき)、東備の人。浪花にきて医を業とす。門に草医戸田斎宮と標せるもめづらし。あるひは唐服に似たるものを着て、劍を負て歩きしこともありしと也。本草に委しく、医生のみならず、好事の士門人となれるもの多し。香川太仲秀庵(筆者注…都賀庭鐘の師)が薬選を難じて、非薬選を著し印行す。爾れどもまた秀庵の才を愛して、その子はこれが門生とせり。好みすれども其あしきをしり、にくめども其よきをしるといふべし。医療もとよりよくすといへども、病客拾人に限て、此数欠ざれば、また他人を療することなし。故に貧なり。あるとき摂津国高槻近邑の豪農、物産の門人にてつねに出入りする人、其母の病の診察を乞ふ。請に応じて至りしが、不起の症なれば辞して帰らんとする時、近隣又親族の病人これかれの診察をこふ。四五人は診したるが、遠く迎へたる人なれば、此折を幸に尚医治をこふもの多し。こゝにして戸田氏怒を発し、主人に対しのとしりていふ。「子は不孝者也。不起の母を題して、えもしれぬ人々の医治をせしめんとするか」と。元来癩性にてよく怒る人なれば、大きに顔色を損じたれば、やうくになだめて謝してかへせり。(中略) 是は物産の門生、したしく見聞人のものがたりなり。

表札にわざわざ「草医」と表示し、唐服のようなものをいつも着て刀を差していたこと、一日に十人しか診察しなかったためにも貧乏であったという。旭山が十人しか患者を持たなかったことは平賀源内も『病名補遺』序文にも「日以十人為限」と記している。また「癩性にてよく怒る人」であった。源内はこの愛すべく恐るべき人物を師と定めたのである。

○旭山の弟子和田東郭の『蕉窓雑話』第五編(文政四年)

先生ノ人トナリニ於ル、其身体ハ至テ矮小ナリシカドモ音色ハ雷霆ノ轟ガゴトク、義ヲ見テハ涙ヲ流シ感ジ、不義ナルヲ聞テハ狂獅ノ如シ。人若不廉不遜ナルコトアルトキハ其怒リアタリガタケレドモ、若ヨク過ヲ悔テ罪ヲ謝シ「君子ノ怒リニ因テ益ヲ得タリ」ナド云ヘルトキハ忽チ怒ヲ止テイサ、カモ不平ノ色ナキコト譬ヘバ雨後ノ朗月ノ如シ。

(中略)

自療治セラレタル病者若死スルトキハ、一切ニ其家ヨリノ謝物ヲ受ラレズ。若止ズシテ再ビ来ルトキハ其使ノ前ニテ封ヲ更メテ其旦那寺ヘ贈ラシメラレタリ。若又大病ナドノ平快シテ反テ謝物ヲ薄フスルモノアルトキハ、其激怒セラルルコト猛虎ノ怒レルガゴトク「尔等ハ活命ノ恩ト云ヲ知ラズヤ。先ニ極テ困苦セルトキハ頭ヲ垂レ地ヲ叩

テ窮ヲ告タリ。其苦惱ヲ救シモノハ我ニアラズシテ誰ソヤ。然ルニ今此些少ノ金ヲ以テ謝セントス。是能ルガ命ヲ買得ンヤ。」ト云ルレバ胆ヲ冷シテ大ニ恐れ歸リテ後更メ封シテ来ルトキ、若其謝物過分ナルハ又大ニ立腹シテ、「大抵医ニ謝物ヲ贈ルニモ其ヨキホドノアリシモノ也。我又何ゾ多キヲ貪ランヤ。」トテ面前ニ秤リヲ出シ自取ベキホドヲトリ、其アトハ皆返サル、コト毎々ニテ其他諸事ニツケテモ廉潔ナルコト皆此ノ如シ。

(中略)

平日ニテモ義臣烈士等ノ談ヲナス時ハ感賞ノ余リ声ヲ放テ号哭セラレタリ。又其容貌ハ先白髮髯ニテ身ニハ「ホイチン」ト云ヘル服、オヨビ、シンイヲ服シ〔割註〕初シン衣ヲ白ニテ着シラレシカ、動モスレバ街上ニテ犬ノ為ニ吠ラル、ニヨリ、後ニハ色ヲ染ラレタリ、背ニ大ナル綬ヲツケ、飾リタルチサ刀ヲ帯シ、恬然トシテ間歩セラ、ル、コト其常ナリ。

小軀ながらも声は大きく、義を見ては涙を流し不義には怒るといふ愛すべき気性であり、診察した病人が死に至る時には決して謝礼を受け取らないが、大病を治した時に謝礼が少なければ激怒するという怖い先生であったことが記されている。そして先の『崎人伝』では唐服のようなといわれていたものは、「ホイチン」なるもので、ややもすれば街上で犬に吠えられる程の奇矯な出で立ちで常に刀を持って大阪を闊歩していたと言ふ。

○旭山の『病名補遺』に源内が寄せた序文

予觀本邦近世之医。又有甚焉者矣。多売名價為務。不能精一心於其術。藥物惟聽市人。而不弁究真偽美惡。盛衣服宮室之飾。以衒世。逞新奇怪誕之弁。而欺人。昵貴戚權門。近富人豪家。餌以圍棋。啣杯。釣金帛。求錄衣。視貧賤人。如土芥。

(『病名補遺』に寄せた源内の序、宝暦十一年)

独我旭山先生則異於是。先生少好學。尤喜於医。博通經史百家之言。該治諸家之說。左本草。右方書。其於藥物也。手自植之園中。不待至乎深山幽壑。而百卉品類森在目前矣。親弁真偽。

古人有言曰。売薬者、両眼、用薬者一、眼、服薬者無眼。至如後世、不
 独服者之無眼、而売者与用者亦俱無眼矣。今夫本邦、売者亦是誤
 認、翻白菜為紫胡、万年青為藜蘆之類、不可枚舉。是我旭山先生所深憂
 也。今茲初夏、先生会同好、諸子相与、出藥物數品、弁其真偽、品其上下、且
 就中世所不普、知者命画工、圖之、輯為一書、遂上之、梓以
 公于世。蓋志斯道者、扱此書採扱、則庶免所謂無眼之憂哉。

○木村兼葭堂『異斎翁遺筆』

余幼年ヨリ生質軟弱ニアリ。保育ヲ專トス。家君余ヲ憐テ草木花樹ヲ植ル事ヲ許ス。
 親族ニ葉舖ノモノアリテ物産ノ学アル事ヲ話シ、稻若水〔物産家中興、名宣義〕・松岡
 玄達〔字成章、号恕庵、平安人、以物産学継若水而興〕アル事ヲ聞ケリ。一、二、三、歳、ノ比、
 京師ニ松岡門人津島恒之進〔名久成、字桂庵、号彭水、又如蘭軒、受業松岡先、生、越
 中高岡人、法橋津嶋玄俊ノ弟、松岡学頭タリ〕物産ニ委事ヲ知り、コノ頃家君、ノ京遊ニ
 従、始テ津嶋先生ニ謁シ、草木ノ事ヲ問フ事一会、翌年余十五歳家君ノ喪ニ、アイ、十六
 ノ春余家母ニ從テ京ニ入、再津島氏ニ從学シ門人ト成ル事ヲ得タリ。之ヨ、リ屢書ヲ通シ
 物産ノ説ヲ聞キ、津嶋氏モ毎歳浪華ニ下リ本草ノ会アリ。數出会ス。宝曆四年甲戌津嶋
 氏客中ニ卒ス。同社戸田斎〔号旭山、備前人〕・江戸田村元雄〔坂上、登、号藍水〕・平安
 直海元周〔名龍、越中人〕・ナド書ヲ通シ考索ヲ事トス。(中略) 山脇・香川〔福田注〕
 香川修庵、都賀庭鐘の師)・後藤ノ先輩ニ交ル事ヲ得タリ。

○『文会録』縁起

文会録縁起

一日書舖来、請上梓、於会実主客品目、公諸四方。予許之。仍復覽
 一其題名。予曰古云、君子以文会友、以友輔仁。蓋以日月星辰虹霞雲
 霞雨露霜雪、天之文也。山海原野金石鳥獸虫魚草木、地之文也。所謂君子之文者、人之
 文也。夫天地人之文、雖各異、其趣而文、為文一已矣。而又葉之為物、上自
 雨露霜雪、下至虫魚草木、無一不用焉。即今設此会也、雖不敢輔仁之
 設、而亦益乎吾仁術者、不為解矣。則且假于彼、以取於此、強題
 曰文会録。是可、書舖唯而去。

皇和宝曆庚辰夏五月上旬 浪花百卉園主人書

○『文会録』請啓

薬物会請啓

宝曆丁丑、戊寅兩年、東都田村藍水子、始以藥物会友兩次。翌年己卯、其門人平賀生復繼之。謂其所自具者為主品、他所出者為客品。会凡三次、而主客品類至六百有余種。云、嗚呼盛哉。非列侯朝会商賈輻輳之地安

能得此盛云耶。方今吾浪華雖不可比並、東都之隆盛、亦是本邦二三大都、而僑醫百工不乏其人。齋、寒陋雖不可企及、藍水子之明鑑、然亦執医柄者數十年于茲。且自少壯有囊駝之癖。宅後開小園、自号百卉園、暫得閒暇、輒耘鋤灌漑、独以自樂焉。是以不堪畝羨、其拳竊傲、冀欲期明月望日、以弊園所在草木數十種、会于同志之士、与共質明、疑惑弁正、真偽焉。四方君子莫不棄寒陋、各携可充藥用者一二種、以賜來会、幸甚。惟祈。惟祈。

宝曆庚辰春三月百卉園主人 旭山戸田齋啓

○『文会録』メンバー

紀州和歌山 山瀬次右衛門（紀州の薬種屋、山瀬春政、梶取屋とも。若山東田中町の人。宝曆十一年『鯨志』著（旭山序文）、物産会取次）

備前岡山 某氏

東都 田村元雄・元長（元雄男）

官医 藤本立仙・岡田養仙・岡了伯・宮村永隆

（『蘭学事始』に「官医岡田養仙老、藤本立泉老などは其頃まで七八

度も腑分し給へし由）

水戸侯侍医 志水周安

東都 後藤梨春（蘭学者、明和四年『紅毛談』出版して絶版処分）

東都 松田長元（江戸で薬品会開催）

東都 福山舜調（田村元雄の『朝鮮人参耕作記』の校訂）

高田侯侍医 大口玄周

東都 古川章甫

小浜侯侍医 中川純亭（中川純庵、『物類品隲』の校訂を始め、源内の協力者。『解

体新書』にも協力）

郡上侯侍医 澤 東宿

大多喜侯侍医 青柳仙安

東都 福山喜庵

姫路侯侍医 樋口仙安

東都 石川玄丈

姫路侯侍医 大平宗本
東都 河野亮達
宮津侯侍医 中久喜玄常
讃州人寓学于聖堂 高松侯賜学資月俸数口 平賀源内
紀州和歌山 宮田七郎右衛門・志摩重蔵
大坂 赤澤恭節・藤木文庵
撰州今津 介中拙斎
南都 藤田七兵衛（物産会取次）・井上平五郎・尾西伊兵衛・和角養軒
大坂 白井道順
撰州明石 藤田養庵（物産会取次）
平安 直海元周
平安 末吉八郎右衛門
平安 植木屋政右衛門
紀侯侍医 三木恒斎
越中州北野村 逸見喜右衛門（物産会取次）
芸侯侍医 村上周格
平安 植木屋祐十郎・鵜橋主人・松下金六
高松侯侍医 藤木立殷・杉原養倫・玉越勝運
八幡 片岡志摩
高松侯侍医 長尾謙定
大坂 矢木俊越・武中周蔵・豊嶋杏伯
大坂 古林杏節・久保津敬元・古林正甫・山田順庵・山田正因（順庵男）・中
村東圭・森立軒・森衆允・林隆庵・小芝新助・中村藤兵衛・木下宇兵衛
和州松山 森野賽郭翁（宇陀松山の人。享保十四年に薬園開発、物産会取次）
高津芸種家 松井吉助（浪速百景に数えられる植木屋。彼の百花園の牡丹が有名）
天満 渡辺主税（天満宮。『浄貞五百介図』を所有、源内が閲覧のために訪問。
有坂道子氏「木村兼葭堂の交遊」）
河州中野村 重岡見昌（八尾の人。物産会取次）
大坂 宮城玄忠
南都 安倉茂左衛門
大坂 武田三迪（伊丹の物産会取次）
天満 都賀六蔵（小説家、都賀庭鐘）
大坂 三木東洲
讃州高松 入江只彦
讃岐古高松 久保桑閑（源内の讃岐における後援者の一人。物産会取次）
河州八尾 戸村宇左衛門

大坂 沙田八右衛門
河州上嶋 寺嶋樂山
濃州須賀 今井田三右衛門（物産会取次）
尾州津嶋 冰室左近
大坂 木村吉右衛門（木村兼葭堂）
河州 田中清右衛門（八尾の人。山中浩之氏「在村医家の形成と儒教―八尾田中元緝を中心にして―」）

伊丹 坂上伊兵衛（蜂房）
伊丹 上嶋無動
河州栢原 吉田與二兵衛
和州 内田七右衛門
大坂 行松春庵
河州 坂戸孫三郎
大坂 桂川一馬
天満 丹波屋伊兵衛
大坂 松屋甚兵衛
天満 植木屋莊右衛門
讚州陶村 富山得水
讚岐陶村 三好喜右衛門（源内の讚岐時代の本草学の師とも言われる。物産会取次）
天満 植木屋佐兵衛
紀州湯浅 橋本仙質（仙志津とも。物産会取次）
大坂 岡 桐茂
高松侯薬園宰 池田玄丈（高松藩医、藩の薬園管理、砂糖製造に着手）
讚州高松 柴野氏
長崎唐館医 柳 隆元

○会則

會例

一 御出座御望の方は定日は雨天にても早朝より辰の上刻までに御出可被成候。午時前後には退散いたし候。乍然方一時刻のび候程も難斗候間、遠方之御方は御勝手に食物御持 参可被成候。尤會料は少も入不申候。

一 御出座御望の方は草木金石蟲魚鳥獸の薬食の用に立る物一両程御携へ御出可被成候。會席狭く候間、三種とは御出し被下間鋪候。其内金石等は重高に無之（カサダカ）候間数多にても不 苦候。乍然此已後は年々一度づゝ断ず相企候間数多御貯御望候はゞ永く御出し可被下候。但し、遠方は重而の会に御出座之程も難斗候間いか程にても御勝手に可被成候。

尤草木 の長大なるは枝を御折、花瓶に御さし御出し可被成候。

一 いまだ御知人にて無之候共御望に候はゞ無御遠慮御出可被下候。たとひ前々より御近付にても菓食の物御持参無之御方はかたく許容不仕候。

一 御出座の御方は御出し物の名と御自身の名とを御記し、一日も早く手前または御手寄の方迄御しらせ可被成候。若遅く候て御出しもの先に御案内の方と同物重り候得者、後の方へは他物に御替被成候様に御断申候間、随分早々御しらせ可被成候。しかれ共遠 方はいかほど同物重り候共格別の事に候。

一 無名の異物等御家蔵に被成候はゞ何によらず御出し可被成候。衆評の上名も付候へば博物の一と存候。

一 一定日に至り俄に御用等出来候得御出不被成候共、前番被仰聞候御出し物は無間違御持せ御越可被成候。列座の衆中へ披露いたし候後直に御使へ可致返遣候。但し金石骨角等は重(ヲモ)め御改、または数々有之物は其数幾箇(イクツ)と御書付可被下候。

一 此会の儀は請啓(シヤウケイ)に書候通、御たがひに真偽を質明(タゞシアキラ)め疑惑を辨正(ワキマヘタゞス)べき為に候へば、少にても疑しく思召候義は無御遠慮可被仰聞候。衆評の上致決定候。尤此方よりも疑し く存候事は不致遠慮候間必御怒(イカ)りなく衆評を御待可被成候。勿論遠方より御出し候間萬 一御心に不 (ル)相叶 (ハ)儀御座候とも御宥恕可被下候。以上。

三月日

會主 戸田斎